



第2号 2008年3月発行

発行者：宮古島市立教育研究所

所長 島袋正彦

住所：〒906-0392

沖縄県宮古島市下地字上地 472-39

宮古島市下地庁舎3階

電話：0980-76-6400 F A X：0980-76-6154

http://www3.city.miyakojima.lg.jp/kenkyusyo/



教育研究所開所2年

所長 島袋正彦

晴れた冬の日、教育研究所から望む朝風の与那覇湾は岸辺の緑を鏡のように写し出してさわやかな気持ちにしてくれます。

さて、下地庁舎の3階に教育研究所が設立されて2年が過ぎようとしています。まだ、力強い歩みとなっていないかもしれませんが、着実に足跡を残しつつあるものと考えます。

宮古島内において半年間の長期研修が行えるということは、経済的負担の軽減もさることながら、研究の進捗状況や成果を所属校の子ども達により検証できることや、自校の学校課題に即した研究を進めることができることも大きな利点であると考えます。

現場を離れて研究所において半年間の研究に入ることを決意するに至るまでにはそれなりの葛藤の発生や、研究後の報告・発表のことを憂慮することで、二の足を踏んでしまいがちであることも理解できなくはありませんが、そのようなマイナス思考ではなく、研修により自身の学習指導能力等が向上し、周りをリードする自分の姿に思いを馳せることの方が重要であると考えます。

多くの先生方が、本研究所における長期研修に挑戦されることを強く希望いたします。

ところで、今年度の最大のトピックは、琉球大学教育学部との連携協定の締結であると考えます。これまでに、宮古島市立小・中学校の音楽教師を対象とした研修会、算数・数学・理科

の宮古の子どもたちを対象に実施された授業研究会、また、長崎大学・鹿児島大学・琉球大学の三大学連携事業の一環として宮古島において開催された「教育フォーラム」におけるシンポジウムとワークショップの開催等と、これまではなかった取り組みを実現することができました。このことは、宮古島市立小・中学校教員の資質と能力の向上に資することができたものと評価しております。

ひきつづき、次年度におきましても連携事業によるいくつかの研修会開催を予定しておりますが、琉球大学教授の方々を各学校の校内研修等に招聘することも可能です。この連携事業を宮古島市立小・中学校教師の資質と能力の向上のために有効活用することができれば幸いに思います。

末尾に、本研究所の運営に多大なご指導ご助言を賜りました関係者の方々に厚く御礼を申し上げます。

==== もくじ ====

教育研究所開所2年	- 1 -
長期研修を終えて	- 2 -
教育相談室より	- 3 -
「まていた教室」での2年を振り返る	- 3 -
研修会だより	- 4 -

長期研修を終えて



第2期 久松中学校 教諭
嘉手苅 美智恵

入所式で決意を表明した日のことがつい、昨日のこのように思い出されてきます。自分自身の課題、そして教育活動における課題を解決すべく取り組んだキャリア教育に係る研究でした。テーマの設定から理論研究、実践、そして研究成果のまとめと報告、確かに容易なことではありませんでした。しかし、先生方に一つ一つ教わりながら実践していくという過程を通して、毎日が何か新しいものとの出会いとなり、それは楽しみの一つともなりました。私自身の進化を試す場でもありました。

ささやかな成果ではありましたが、キャリア教育について学び始めたばかりの、私の研究の成果を皆さんに報告し、評価していただいたということは、私にとってひとつの自信となり、これから現場に戻り仕事をしていく上で大きな支えになると

信じています。

私も、教職に就きましてから、23年目になります。本来ならこの年齢は、人間の発達段階からしますと、本格的に進路選択をする時期でもあります。私自身も教職生活において、今後、自分自身の在り方を選択する時期でもありました。このような時期に、このキャリア教育の研究という貴重な機会に恵まれ、教師としてのスキルを身につけさせていただいたことは、私の今後のキャリアの形成にとても役に立ったように思います。

また、研究所でのミニ研修も大変充実していました。

「人みな教師」、「研究と修養」、「私たちは生きていく限り、自分を取りまくすべての人々から常に学びつつけること、そして、自分自身を磨き上げていくこと。」「決して傲慢にならず、人々の役に立つこと。」

これらの言葉には、強烈な印象を覚えました。ぜひ、私の座右の銘として、またある時は、自分自身へのエールとして、大切にしていきたいと思えます。



第3期 砂川小学校 教諭
砂川 栄作

第3期研究生として、10月1日から3月31日までの6か月間、多くの先生方の支援を頂き、無事に研修を終えることができました。私自身教職について16年になります。離島勤務で、なかなか研修の機会を得ることができない中、宮古島教育研究所開設は、これまでの私自身の教育実践をふり返し、今後の方向付けをする大切な研修としての機会を与えてくれました。

今回の研究は、「児童生徒の学習意欲が低下していると言われている中で、問題解決的な学習において児童が本来もっている知的好奇心や知的欲求が起こる問題提示を工夫し、児童の問いからくる算数的活動の充実を図れば、学習意欲をもって生き生きと学び合う児童の育成が図られるであろう。」という研究仮説を立て、実践してきました。問題解決的な学習は、児童にとっては「自ら考え気づいていく」困難さがあります。教師にとって

は「自ら考え気づいてほしい」という立場で支援する苦しさがあります。そのため、教師は知識注入型の教え込む指導に頼りがちになってしまいます。そして、テストによる知識理解の定着に安心をします。その結果、児童は指示待ち的な学びとなり、解決の喜びや学習の達成感・成就感を味わうことができないことから、学習意欲の低下につながっていくと考えます。

しかし、教師が児童の考えに寄り添って支援していく中で、「分かった」「できた」が共有できた時、問題解決的な学習は、教師と児童、児童と児童との信頼関係を築きながら学習意欲を高め、魅力的な授業に変わっていくのではないのでしょうか。

現場を離れて広い視野での研修、琉球大学との協定によって実現した大学での研修等、充実した6か月でした。「教師が変われば子供が変わる」、今回の研修で再確認した言葉です。常に「学ぶ意欲」をもって研究していく事の大切さを先生方の指導助言から学ぶことができました。今後更に、子供達と寄り添いながら、共に成長していける教師であり続けたいと思えます。

教育相談室より

宮古島市教育相談室では、不登校をはじめとする問題行動等、教育活動全般に関わる、子ども・保護者・教師等の不安や悩みを受け止め、語り合いたいと考えています。

今年度も、各機関と連携して、生徒への学習支援や保護者との面談、学校への訪問相談、適応指導教室の体験学習支援などの相談活動を行ってきました。

これらを通して、学校生活においては、不登校の予兆となる子どもからのサインに早期に気づき、対応・支援することの必要性を感じました。また、家庭生活においては、子ども本来の成長に合わせるよりも、親の都合を優先していないだろうかという疑問のもとに、私たち大人、一人一人の在り方が問われているように感じました。

『人はそれぞれ、目に見えないものを背負って生きている。それを忘れずに、自分の生き方を正し、他人の生き方への理解を深めていきたい。』

相談室の壁に貼られたこの言葉の重さを痛感する毎日でした。

この1年は、立ち止まっている子どもたちのそれぞれが持っている、「生き直す力」に寄り添うことや、言葉にならない思いを不器用に表現する子どもたちに共感し、彼らの心に響く手立てを模索する長い時間でもありました。更に、様々な家庭に生きるそれぞれの子どもたちの健やかな成長と、彼らに関わる大人たちからの深い愛が得られる「あたりまえの環境」を願う日々でもありました。

子どもたちが自分で気づき、動き出すその時をゆっくりと待ち、心を尽くして見守る大人の一人でありたい。

平成19年度の相談活動でも、多くの関係機関の皆様から、御理解とご協力が得られました。相談員一同心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

教育相談員

与那覇真 安慶田昌宏 福里廣太郎 平良加代子

「まていだ教室」での2年を振り返る

適応指導教室での2年間で、私の中に、これまでの教師生活にはなかった感覚が得られました。それは、未だ漠然としたことなのですが、言葉に表しますと、「教育は自分の意図したことを行うばかりではない」「自分の価値観を押しつけてはいけない」「関わる人々の思いだけでは解決が難しいこと」「不登校の子ども達も大きな内なる力を持っている」等でしょうか。

「物事には原因があるからこそ結果がある」と言われます。ですが、適応指導教室にやって来る子ども達が学校へ行けない原因は、複雑で、簡単に説明できるものではありません。そこで、原因を追及するのではなく、現状の子ども達をそのまま受け容れて、共に、よい方向へ一歩前に進むことをめざしてきました。「受け容れる」ことは、たやすいことではありませんでしたが、子ども達と過ごした一進一退の日々は、今まで結果を求めて走ってきた私に、「一人一人の子ども達の可能性を信じて、焦らず、じっくり、そしてゆっくりと待つ」という貴重な体験を与えてくれました。

この2年間で出会った子ども達とは、偶然ではなく、出会うべくして出会ったような気がしています。子ども達だけではなく、その子を取り巻く全ての人に支えられてきました。学校に行けない子ども達の居場所づくりとして行った様々な活動・自然体験・勤労生産・保護者を交えての教育相談等は、子ども達一人一人に寄り添って過ごした日々でした。子ども達に「させる」のではなく、共にそれらを共有した私たち職員も、子ども達と共に学ばせてもらいました。そんな中で、達成目標を立て、それに向かって力いっ

ぱい走るだけでなく、現状をそのまま受け容れ、存在することに感謝するだけの時間も必要なのかもしれないと思いました。この経験は、私の教師としての今後に必ず役立つことだと実感しています。

穏やかな与那覇湾を眺めながら、支えていただいた全ての方々に心から感謝の気持ちでいっぱいです。今、変容のエネルギーを蓄えている子ども達と共に、この教室を飛び立つ準備をする時を迎えています。この研修で得たことを大切にしながら、今後へ役立てていきたいと思えます。研修の機会を与えていただいた教育委員会をはじめとする教育研究所、教育行政の方々に感謝します。

指導教諭 下地真喜子

沖縄県適応指導教室連絡協議会「講演会」

11月2日 宮古支庁2階講堂

ビジネス・コーチの石川尚子先生を迎えて、「子どもを力づけるコミュニケーションのあり方」という演題で講演をしていただきました。教員・保護者等、80名以上が参加し、コーチングの基礎と演習を行いました。会場では、宮古島市適応指導教室「まていだ教室」の展示報告も行われました。



研修会だより

琉球大学教育学部との連携事業

宮古島市教育委員会と琉球大学教育学部との連携事業で、大学の先生方による研修会や出前授業が開催されました。また、緒方茂樹教授による研究教員への論文指導、さらに小・中学校の教員が琉球大学で研修できるなど、今までにない研修の機会が提供されています。



音楽科研修会

7月20日 久松中学校
津田正之准教授と奥様2人で、歌詞から切り込む音楽の授業について講義をしていただきました。終業式の日でしたが、主に中学校の音楽の先生が参加してくださいました。

いただきました。終業式の日でしたが、主に中学校の音楽の先生が参加してくださいました。

算数・数学科研修会

12月14日 下地庁舎1階会議室
小田切忠人教授に、「スペシャル・ニーズのある子どもたちの数と計算の学習への教育介入」というテーマで講義をしていただきました。行事を変更して参加した学校もあり、会場いっぱいの参加者でした。



理科の公開授業・意見交換会

1月9日 鏡原中学校理科室(1年33名)

5校時に、吉田安規良准教授がドライアイスや液体窒素を使って、物質の3態の授業をしました。普通では見ることのできない二酸化炭素や酸素の液体を見るなど、好奇心をくすぐられる授業でした。6校時には、伊藤彰英教授が、溶解について、製塩法を用いた授業を行いました。溶解度の違いを使った、製塩法に「目からウロコ」の授業でした。授業後には、小中学校の理科担当教師との意見交換会も持っていただき、有意義な時間となりました。



教育フォーラム in 宮古

2月29日 宮古支庁2階講堂、南小学校、久松中学校、北中学校

長崎 - 鹿児島 - 琉球の三大学連携事業「三大学の連携による離島・僻地校での教科指導力向上のための教育課程の編成 - 大学教員と小・中学校教員の相互授業訪問を軸として - 」中間報告会として、宮古島市でシンポジウムと7つのワークショップが開かれました。長崎や鹿児島の離島の様子も分かり、多くの刺激を受けた一日となりました。



数学出前授業

3月14日 池間中学校・平良中学校



鹿児島大学の磯川幸直教授が、池間中学校と平良中学校で出前授業を行ってくださいました。図形分野での折り紙という伝統文化の中にある数学的な価値をコンピュータという新しい技術を使って教えてくださいました。中学校の数学担当の先生方との研究会にも参加して頂きました。

